



【住 所】青森県むつ市小川町1丁目2番8号

【病院長】小川 克弘 先生

【病床数】486床(一般376床、精神106床、感染4床)

【スタッフ】医師 7名(うち専門医3名)、看護師 15名(うち内視鏡技師 7名)

【内視鏡検査・治療総数】(平成19年度)5,500件(上部消化管 3,630件、下部消化管 1,119件、ERCP 250件、ESD 30件、他)

【保有内視鏡総数】上部用 9本、下部用 7本、超音波内視鏡 2本、十二指腸スコープ 4本

地域の高い医療ニーズに応えるため 最先端の内視鏡検査と治療を実践

人口10万を擁する下北地域唯一の総合病院として 多様化する医療ニーズに的確に対応

むつ総合病院は、青森県の下北半島のほぼ中央に位置する地域唯一の総合病院です。この地域は青森県の医療区分では二次医療圏に位置づけられているものの、県内主要都市から遠隔にあることなどから、一般的な疾患については同院で治療を完結させることが求められています。このような環境の元、同院は周辺地域を含めると約10万人の地域住民の救急・高度医療をも担う地域の中核病院として発展してきました。

同院の内視鏡室でも周辺施設からの紹介患者が多く、かかりつけ医や患者様のニーズに応えるべく、安全で質の高い内視鏡検査や治療を実践しています。通常の内視鏡診療に加え、消化管出血や胃・食道の静脈瘤破裂などによる緊急内視鏡止血の症例も多く、専門医や内視鏡手技を熟知したスタッフが当番制で24時間診療にあたっています。同院では総胆管結石や胆嚢結石、胆管癌、膵臓癌などの胆膵系の症例も多く、内視鏡室では内視鏡治療部長の岡本豊先生を中心に積極的な内視鏡的治療を行っています。岡本先生が赴任される平成12年以前まではこれらの症例に対して主に経皮的なドレナージを行っていましたが、入院期間の短縮や合併症発症率の軽減、内瘻化が容易にできるなどのメリットを考慮し、現在では9割以上の症例で内視鏡的アプローチを選択しているそうです。その他、膵仮性膿胞や慢性膵炎などの膵臓疾患に対するドレナージや、EMRやESDなどの新しい治療内視鏡手技にも積極的に取り組む

など、患者利益の高い最新の内視鏡治療を提供すべく、日々診療技術の向上に務めています。

合併症のリスクを低減するために 安全で確実な手技を追求

内視鏡室では若手医師の教育にも力を入れており、ベテラン医師がマンツーマンで指導する体制を整え、特に診断の仕方などを丁寧に説明しているそうです。また、セミナーや学会への参加を奨励し、特にライブなどの臨場感のある教育機会を利用することで、教科書的な知識では得られない実践的な技術を体感してもらうようにしています。岡本先生は最近『胆と膵Vol.29』に「EST・EPBD併用法の検討」を寄稿されていますが、このESTとEPBDを併用する乳頭処置の方法も、元々は「中切開・大切開を十分に会得していない経験の浅い医師が、どうすれば合併症のリスクを伴うESTの手技を安全に行えるか」という観点から取り入れたものでした。岡本先生は、「ESTナイフで小切開を行った後にEPBDバルーンで徐々に拡張するEST・EPBD併用法は、平均截石回数でEST法、EPBD法に比べ同等であり、また早期合併症も43例中1例も認めなかったため、効率の良い截石と合併症軽減という観点から有効な治療法であると思います」とご説明されました。術後1～2年のフォローアップデータでも再発率に有意差はなく、胆道癌の合併も1例もなかったそうです。

● リスクマネジメント徹底の観点から 処置具のディスポーザブル化を積極的に実施

内視鏡室では感染対策にも意欲的に取り組んでおり、ガイドラインを遵守したスコープの洗浄・消毒を徹底しています。内視鏡関連処置具のディスポーザブル化も進んでおり、患者様が安心して受けられる内視鏡検査や治療を実践しています。岡本先生は、「以前はディスポーザブル製品を再生使用したこともありましたが、製品性能の劣化による手技中のトラブルを経験してから全て単回使用を徹底しました」とディスポーザブル化の経緯についてご説明されました。

現在同院では病院機能評価Ver.5.0の取得に向け、病院全体で様々な取り組みを行っています。内視鏡室師長の棟方祐子さんは、「内視鏡室では感染対策の強化や衛生環境の見直しが必要だと考え、感染対策に対するスタッフの意識統一や、現在実施しているスコープの洗浄・消毒の履歴管理を徹底しております」とお話になり、高いレベルで実施している感染対策をさらに確実なものにする意欲を語っていただきました。



内視鏡室のみなさん
(前列左から千葉先生、棟方師長、八森先生、川部先生
後列左から相澤先生、岡本先生、斎藤先生)

